

令和元年6月6日現在

機関番号：23804

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02243

研究課題名(和文)近代日本におけるラッパ受容に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Study on the acceptance of bugle calls in modern Japan

研究代表者

奥中 康人 (OKUNAKA, YASUTO)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授

研究者番号：10448722

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、近代日本のラッパの実態を解明するための手掛かりとして、主に群馬県で用いられていた消防のためのラッパ譜と、明治初期における陸軍のラッパ譜に着目し、個々の楽曲について分析を行った。

群馬県の消防組に關係する1895年から1940年までのラッパ譜7点に収録された楽曲を分析した結果、軍隊ラッパ譜からの転用と消防のためにつくられた楽曲から構成されていることが判明した。また、明治十年代に用いられたと推定される陸軍のラッパ譜3点に収録された楽曲の分析によって、その7割はフランスのラッパ譜を原典としているが、3割は日本で創作された可能性が高いことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ラッパは、幕末明治期にもっともはやく入ってきたヨーロッパの楽器の一つであるにもかかわらず、日本への導入後の展開については、ほとんど何もわかっていない。

本研究は、明治十年代に用いられた陸軍のラッパ譜、および明治後期以降の消防ラッパ譜を調査したことによって、実際に吹奏されていたラッパ音楽の一端を明らかにした。

とくに、明治初期の陸軍がフランスのラッパ譜を用いたことを具体的に検証した点、そのフランスのラッパ譜が消防組を通して、群馬県のような地域にも伝播していたことが確認できたところに、大きな意義があると思われる。

研究成果の概要(英文)：In order to clarify the bugle music culture in modern Japan, I analyzed the bugle calls or marches, focusing on the music sheets for firefighting organizations used in Gunma prefecture and the music sheet for Army in the early Meiji period.

It was revealed that the seven musical scores from 1895 to 1940 related to the fire department in Gunma Prefecture consisted of the bugle signals used by the Army and the signals newly created for the fire service. And three bugle scores used in Army in the early Meiji period include the signals and marches not only derived from France but also composed or arranged in Japan.

研究分野：音楽史

キーワード：ラッパ 西洋音楽受容

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) ラッパ(英: bugle、仏: clairon)は、幕末維新のころから日本に存在するヨーロッパ起源の金管楽器であり、従来の音楽の歴史研究では、その導入時についての調査については、ある程度進んでいるが(中村理平など)、その後の普及のプロセスや楽譜、文化変容などについては、等閑視されてきた。軍楽関係者(山口常光など)あるいは退役軍人の回顧録等の言説は、有益ではあるものの、たいていは昭和前期に集中しており、明治期についての情報は極端に少ない。また、消防で用いられたラッパについては、普及範囲が全国規模であったにもかかわらず、日本における西洋音楽の歴史研究の調査対象とはならなかった。

(2) 楽器としての消防ラッパの普及と展開や変容について、すでに調査を済ませた長野県の事例では、文献資料は豊富に存在したものの、楽譜資料はまったく存在しなかった。そのため、どのような音楽が演奏されたかは確定することはできなかった(一般には漠然と軍隊ラッパと同じ曲が吹奏されていたかのように信じられている)。これを具体的に確認するためには、残されている消防ラッパ譜と、その楽譜が残っているエリアを調査する必要がある。

### 2. 研究の目的

本研究は、群馬県をはじめとするいくつかの府県の文献資料(とりわけ、県市町村の史誌類や、消防組・消防団資料)をもとにして、ローカルな地におけるラッパの音楽文化の受容を明らかにすること、とくに、楽譜資料(いわゆるラッパ譜)に注目し、当時演奏されたメロディの確定、その影響関係(オリジナル曲なのか、借用か)、レパートリーの変遷等を解明することによって、西洋音楽受容史の空白を埋めることを目的としている。

### 3. 研究の方法

(1) 特定の調査地の公立図書館、資料館、国立国会図書館等で、そのエリア内の県・郡・市・町・村レベルの史誌類の「消防」の項目、および消防組史・消防団史等によって、とりわけ勅令「消防組規則」(M27)以降の消防組織、消防活動、設備や備品について具体的な記述から、「ラッパ(喇叭)」の記載をピックアップし、そのデータを集積、年代順に整理し、記述内容を分析する。

(2) 楽譜資料(五線譜記録)を収集し、個々の曲目やメロディを分析する。同時に、当該エリアにおける刊行年代の異なる複数のラッパ譜を比較することによって、レパートリーの変遷を明らかにし、同時にレパートリーの変遷からラッパ文化の変容を解読する。

(3) 収録されている個々の楽曲について、由来(原典)を調査するために、軍隊ラッパ等と比較検討する。

### 4. 研究成果

(1) [近代群馬における消防ラッパの導入とラッパ譜の制定(文献調査)]。群馬県では1894年前後に公設消防組が設立され、その時期に警察指導の下、ラッパの稽古・練習が行われたことを示す記事が多数確認できた。備品としてのラッパが配備されたというような記事は長野県においても散見されたが、実際の「吹奏」を示す事例が存在するだけでなく、ラッパ譜の制定をうかがわせる文書の記載(「消防喇叭譜相定二付各署宛指示」)も存在するところが極めて特徴的である。

(2) [近代群馬における消防ラッパ譜(楽譜調査)] 群馬県で使用された消防ラッパ譜を収集したところ、7種の楽譜を入手することができた。

「喇叭ノ符」『消防組操法・雲龍水』(1895)

「喇叭符」(1895)(『桐生消防史』に収録)

『喇叭符號手帳』(1896-97)

『消防の栞』(1908)

『消防喇叭音譜』(1929)

『消防喇叭教本』(1938)

『警防喇叭教本』(1940)

「喇叭ノ符」(1895)・「喇叭符」(1895)・『喇叭符號手帳』(1896-97)の3点については、すでに記した「消防喇叭譜相定二付各署宛指示」を傍証する資料と考えられる。また、「喇叭ノ符」(1895)はラッパに固有の「ドトタテチ」の口唱歌と五線譜とを組み合わせたきわめて特殊な記譜法であること、『喇叭符號手帳』(1896-97)は荒砥村の消防組のラッパ手が筆記したもので判読は極めて難しいものの収録されている曲に特徴があること(後述(4))、ラッパの練習の参

加者名簿が含まれている点で、貴重な史料である。

(3)〔レパートリーの変遷〕上記(2)で得られた7種のラッパ譜に掲載されている個々の楽曲(約200曲)を分析し、1895-1940年までのレパートリーの変遷を調査した。1895-1929年の期間に特徴的なのは、おそらく消防のために作曲されたとみられる(つまり、軍隊のラッパ譜からの転用ではない)曲・信号が存在し、割合として多くを占めている(「知事出場」「警部長出場」「署長出場」など)。ただし、個々の楽曲を、年代を追って詳細に比較すると、小さな改定をしている曲、新たに作曲されたものなど、ゆるやかな変化が認められる。とりわけ『消防の栞』(1908)や『消防喇叭音譜』(1929)には、ごくわずかではあるが、明らかに意欲的な音楽表現を目指したオリジナルのメロディも存在し、この地に特有の「ラッパ文化」の萌芽とみることもできる。一方、陸軍ラッパ譜からの転用例については、1885年に制定された『陸海軍ラッパ譜』からの転用がみられるが、それ以降の陸軍におけるラッパ譜の改訂に対応するように、消防ラッパも適宜改訂されていることが判明した(ただし、例外もあり、陸軍の改訂を無視している曲もある)。しかし、昭和10年代になると、曲数が大幅に削減(半減)され、掲載された多くの曲が軍隊(陸軍)のラッパ譜に(たとえば「知事」「警察部長」「拝神」「一般葬儀」は、それぞれ陸軍ラッパ譜の「海行カバ」「皇御国」「国ノ鎮メ」「吹ナス笛」に)差し替えられた。これは、消防組が警防団に改組され、その活動が軍隊的な色彩を帯びたことに対応している。ただし、陸軍のラッパ譜の歴史を顧みると、すでに述べたように1885年に最初に制定された『陸海軍喇叭譜』以降、何度も改訂を繰り返していたが、その改訂はメロディの簡略化(吹奏が、より容易になる方向への変化)が顕著であり、昭和10年代にはきわめて単純なものに変容していた。つまり、1920年代までの群馬における消防ラッパ文化は、陸軍の簡略化されたラッパ譜によって芽を摘まれてしまったように見える。

(4)〔『喇叭符號手帳』(1896-97)に収録されている行進曲について〕。手書き楽譜の『喇叭符號手帳』(1896-97)をさらに詳細に分析すると、出自不明の曲(同じタイトルをもつ曲が陸軍のラッパ譜にも存在するにもかかわらず、陸軍のラッパ譜とは異なるメロディを持つ曲(例えば「喇叭手」「他村引揚」、あるいは「中丸ス」「坂丸ス」という楽曲など)が数曲存在する。とくに「中丸ス」や「坂丸ス」は比較的長い楽曲で、明治後期の群馬でこれらの曲が作曲されたとは考えにくいことから、何か典拠となるラッパ譜が別に存在していたことが推察される。他のラッパ譜を参照しつつ、調査と検討の結果、これらのラッパ譜は、1885年に初めて制定された『陸海軍喇叭譜』より前に、陸軍で用いられていた(と考えられる)フランスのラッパ譜を参照して取り入れられたものであることが判明した。つまり、明治後期の群馬県では、フランスで作られた行進曲が消防手によって吹奏されていたことになる。こうしたレパートリーを群馬県に紹介した人物として、明治初期の陸軍関係者、あるいは(陸軍のラッパ譜を使っていた)警察関係者が想定できるだろう。

本研究は、当初は群馬県だけでなく大阪府、神奈川県調査も予定していたが、大阪府、神奈川県については、分析対象となる「ラッパ」の記述が必ずしも豊富ではなく、調査対象からは外すことになった(大阪府・大阪市や神奈川県・横浜市のような大都市の場合、長野県や群馬県とは異なり、その史誌類において費やされる「消防」項目の頁数が、十分ではない点、群馬県のように豊富な楽譜資料が発見できる見込みが少ない点がネックとなった)。同時に、群馬県のラッパ譜の調査によって、新たに存在を確認することができたラッパ譜が、フランス由来の楽曲であるかもしれないことを確定するために、明治初期の陸軍で用いられていたラッパ譜を調査する必要に迫られた。

(5)〔明治十年代の陸軍ラッパ譜の分析〕靖国神社の靖国偕行文庫に「明治二十年前後の陸海軍ラッパ譜」として所蔵されている(管見の限りでは、これまで音楽史研究において紹介されたことはない)2冊のラッパ譜は、タイトルや年代が記されていない手書き楽譜であるが、収録されている楽曲を分析することにより、1885年12月に制定された『陸海軍喇叭譜』以前に、おそらく1884年頃に筆記された、陸軍で用いられたラッパ譜であることが判明した。収録されている100曲以上の信号や行進曲は、約7割がフランスのラッパ譜から取り入れられたもので、これは「陸軍はフランスのラッパ譜を用いた」という従来の通説に一致する。しかし、約3割はフランスのラッパ譜に見出すことはできず、おそらく日本で創作されたと考えられる。特筆すべきは、2000小節をこえる行進曲(部分的にはフランスのラッパ譜に由来するが、大部分は日本でアレンジされたと思われる)が存在したこと、日本で創作された楽曲は「歩兵第一聯隊」「陸軍戸山学校」等、軍隊内の組織に与えられた信号であること、「靖国神社参拝式」という(これまで確認されていなかった)礼式曲も存在したことなど、新たな発見があった(1885年の『陸海軍喇叭譜』制定以降には使用されなくなったため、このような曲が存在していたこと自体が完全に忘れ去られていたことになる)。また、同時期の名古屋鎮台(歩兵第六連隊)に属したラッパ手による手書き楽譜『喇叭記帳』には、靖国偕行文庫のラッパ譜と共通の楽曲が多数掲載されており、それらのレパートリーが(単に楽譜が残っていたことを示すだけでなく)実際に吹奏されていたことを確認することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

奥中康人「『陸海軍喇叭譜』(1885)制定以前の陸軍フランス式ラッパ譜について」『静岡文化芸術大学研究紀要』査読無、第19巻、2019年、49-67頁。( <http://id.nii.ac.jp/1132/00001468/> )

奥中康人「近代群馬における消防ラッパ譜の制定とその変遷について」『静岡文化芸術大学研究紀要』査読無、第18巻、2018年、65-89頁。( <http://id.nii.ac.jp/1132/00001400/> )

奥中康人「長野県における消防ラッパの普及と変容」『静岡文化芸術大学研究紀要』査読無、第17巻、2017年、65-85頁。( <http://id.nii.ac.jp/1132/00001322/> )

奥中康人「近代浜松における音の空間 日本楽器製造株式会社とラッパ文化」『大正イマジユリイ』査読無、No.11、2016年、49~68頁。

〔学会発表〕(計2件)

奥中康人「明治前期の陸軍ラッパ譜について 3点の楽譜集の分析」日本音楽学会第69回全国大会、2018年。

奥中康人「火事場の西洋音楽 群馬県の消防ラッパ手はどのようなメロディを吹いたのか」洋楽文化史研究会第95回例会、2018年。

〔その他〕

レクチャー&コンサート

奥中康人「ラッパの変態：日本の民俗音楽になったヨーロッパの金管楽器」主催：静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター、出演：諏訪アバンティ・浜松成凜者喇叭隊 H-ENTAI・戸田直夫、静岡文化芸術大学自由創造工房、2017年12月9日。